

(一) 號十八百第

聞新譽常

上陸しての感じ等々種々なる條件が彼れ等海人の描く理想の港に舟を著けるは自明の事實で小名濱港は彼等の描く總ての点に大体合致するであらうか、否とよ航
海に航海を以て各漁場に親
灸しつゝある磐城丸高級船
員に小名濱港と他の漁港との比較を聞くに頭で問題にならぬと嘯く港の便利や關係商人などの反省を促すに各権要港の視察等をなし
玉川村駒木根村長を中心とする事は否定出
せる疑獄事件を切掛けとして村内は鼎の湧くが如き紊
亂さで其歸趨さい判斷に苦暴露を恐れ
せし駒木根村長の刑事事件は公
判を重ねる毎に内容的に判
も最もとし
なしで検察
態にあるは
明し、來る九日の公判はのがある
然らば何人
なつて居る、何れにせよ今道に復歸し
回の疑獄事件は役場派の専
横であり村民の意志でない定するか、

玉川村の動き

君が持つて生れた併氣が、
路默し難く軌道會社の更生に
身を以て努力され其功績空
的
しからず十一月一日を以て
連帶運輸が復活し之と共に
軌道會社の内容を刷進する
に非ざれば此の努力も水泡
に期すとなし押されて西丸
猛氏が支配人に就任し會計
に元實業銀行員白土君を探
用し、内外共に一新を期
すべく生一本の西丸君の
精進振は將に軌道會社復活
三十名乃至五十名
水產教育指導機關
來春四月より開校
濱水產講習所は新

愈々來春四月開校

來春四月開校 濱水產講習隊式教育方針で

岬吟せじ姉妹會社に丸江運輸榮氏は最近寸暇を送店がある、丸江運送店に其人ありと知られる西丸猛吉が持つて生して來貰ふ、この会員退引即豊旨

得られる。本大學歯科に學び卒業
日約二十一ヶ年大原病院に研修
神社寺閣を積んだ秀才である。

然るに常社に専心奉仕せられたる史祝宇佐美氏（世宗大輔と稱す）享保十一年十一月岩城四郎神饌年

拓ける筈
が必要だ其處に
的には従業員の無統制紊乱
と惡材料重積の一路を奈落
に向つて邁進しつゝあつた在職中はもとより
が其餘波を受け最も苦境に寧日なかつた前町
公職引退御 鈴木前町長

門馬忠男氏
今般小名濱明中島橋本
科醫を開業した門馬忠
男氏は小名濱出身で磐中よ
り退職後も

藩屏となす五年秋九月國郡後冷泉天皇の康平五年源
造長を立てらるや、建許義重て墳墓を修理し其側
呂命を以て磐城の國造に定祠廟を創建して其靈を祀
れたり中略

自己開發を計り、港を有商に利用の爲めに資せね、不景氣をかこ、運輸の停北と迄凋落し世間一般に内兜迄見透され其社運は日一日凋落を辿り内部藏して更生の一路つある。

る將來を
治神官

抑も當神社照臨の濫觴——人皇第十三代成務天皇四年（約一千八百年前）詔して國郡に長を立て以て中樞の事を行はせらる——ひ建許呂命の遺業を追慕事に墳塋を修め若松を其に移植して表となし以て

於ては種々ある
關係業者を初め
團体視察又は當
たる座談會等を
支配人に 西丸猛君就
經濟界不振と共に其餘波を
受け頻死の状態にあつた弊
の曙光見ゆが一般
永年苦吟を嘗めつ

して名高し) 四日湊
任の世評で
あつた
社五日高野山奥院
堂剛峯寺、六日熱
宮、七日靖國神社同

磐城國造神社由緒
祭神建許呂命

舟の妙くなるは
先進漁場等を視
來得る丈けの改
焦眉の急たるべ

上人の開山圓光大師
五靈場一番の札所
天柱寺（伯耆蒙溪に
雪舟が画を研究せし

してこれが更新として出席
中であつた豊間漁業組合の
定置漁業『落一網』漁業権
は去る二十三日免許指令と
し所と
、三日
にあり
號笛をならして漁場の位
を一般船舶に知らしむる
條件されてゐる

現在の村會分野を見るに役已を得ざる事であ
場派九名非三名の状勢なれば、黨派的根情を捨て公平な
る淨化せる意志にて適任者長昇格でけりがつ
ぬ程劣つて居る

山稻荷神社、十一日
作樂神社（泊耆津川
り兒島高徳を祀る）
誕生寺（約八百年前
一氏の村
くではあ

網には何等の支障來さず
漁具敷設中は警羅船を備
て晝夜警戒し、夜は白燈
間は白旗を掲げ濃霧の際

件として嚴正公平をモット本小九郎遠藤喜三
ーして是々非々で行ける体 又現在の非常時的
の人物を物色することが必 救するには野崎喜
要である。 伊藤松南氏元老格

嶋寺、廿八日（岡山）
上位經王大菩薩、同
幣中社社備津神社、
出雲大社、卅一日於

（山）最なる思想と規律と忠實を旨同日官として教育する方針である。豊間漁業組合の間で大敷沖出し二千十問り短縮されてゐるが五百十問左方に移動され江名名濱兩漁業組合共同の大

人を得るは容易なる問題で、を得る事が第一條あるまい。夫れには第一條う、現在見渡す處

十月廿二日外宮、廿六日金比羅様、西丸一鉢

内宮、は飛塚場長立案の軍隊式体操教練に依り健康体に健全沖出しへ豊間地先千九百零日屋

